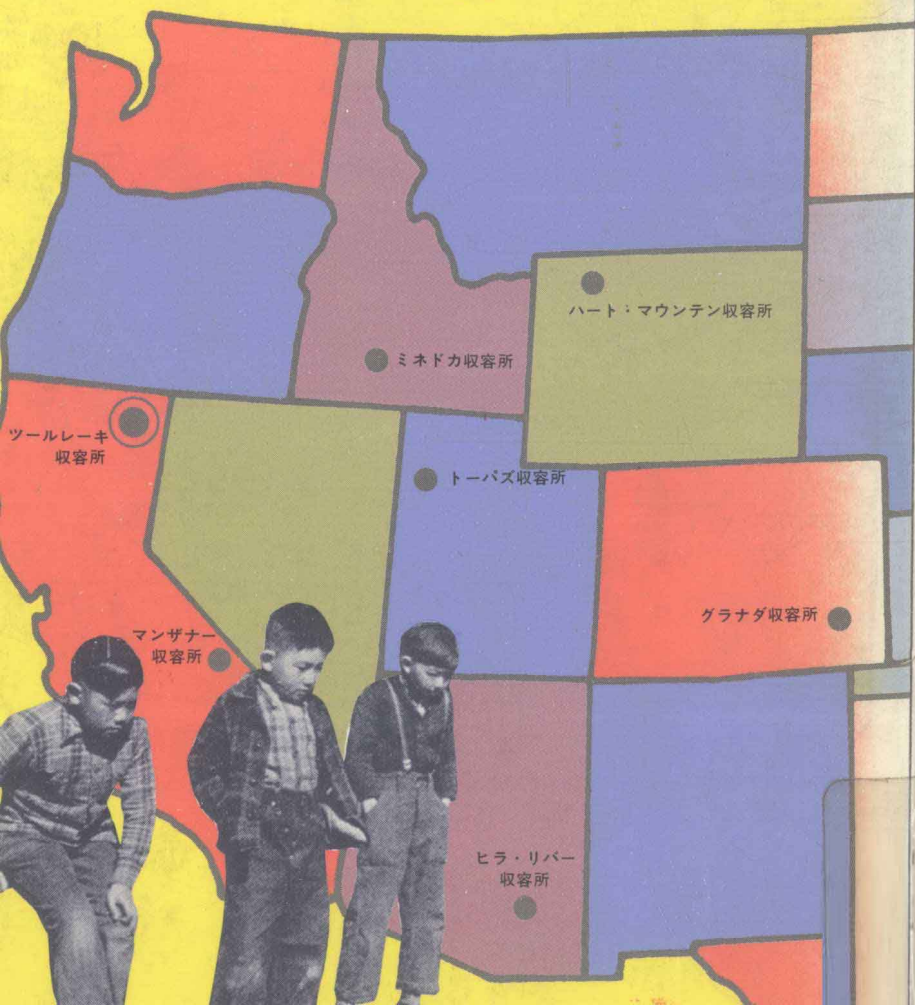


カリフォルニア 日系人強制収容所

白井 昇





A dark, grainy photograph showing the silhouettes of several people, likely Japanese American families, standing in a line. They are holding hands, forming a chain. The background is dark and textured.

カリフォルニア日系人強制収容所



A map of the United States, showing the outlines of the states. Numerous small, dark rectangular markers are placed across the map, primarily in the western and central regions, indicating the locations of Japanese American internment camps.

白井 昇

河出書房新社

白井 昇 (Noboru Shirai しらい・のぼる)

明治40(1907)年、広島生。昭和6(1931)年、広島高等師範学校卒業後、奈良県立郡山中学(現郡山高校)教諭を経て、昭和9(1934)年渡米。カラマーズ大学、スタンフォード大学院卒業。その後、ミシガン大学院、プリンストン大学で学ぶ。太平洋戦争中、ツールレーキ収容所に抑留。終戦後しばらくペンシルバニア大学で教鞭をとる。昭和27(1952)年、日米時事新聞社入社。現在、同社相談役、朝日放送アメリカ支社長、日刊スポーツ嘱託。朝日ホームキャスト放送社長。

カリフォルニア

日系人強制収容所

白井 昇 著

©1981

一九八一年二月九日 初版印刷
一九八一年二月二〇日 初版発行

河出書房新社

発行人 清水勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

TEL(四〇四)二二〇二(営業)

(四〇四)八六一一(編集)

振替(東京)〇一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

装幀 栗津潔

Printed in Japan

まえがき

先年、妻と一緒に、太平洋戦時下の収容所で生まれた長男をつれて、オレゴン、カリフォルニア両州の境にあるツールレーキ日本人収容所跡を訪れた。

すでに終戦から三十余年、収容所を出てからの歳月はほぼ長男の年齢に相当する。あのころ、千幾百棟もあったバラックやそれを囲んで張りめぐらされていた有棘鉄線もいまはなく、見渡すかぎりセージブラッシ（砂漠に生える灌木）の生える茫漠とした荒野と化していた。わずかに、カリフォルニア州の史蹟保存地指定の記念碑が、かろうじて収容所跡を物語るだけである。史蹟とはいっても、日系人を囲った歴史の跡など、物好きな白人ですら訪れることもなく、時たま私たちのような、回顧にかられた一世や二世が、年に一度ほどバスで訪れるくらいなものであろうか。

その昔、収容所の管理局があったあたりに、二棟の粗末なバラックがあって、ひっそりマーケットを経営している。中へ入って、店主とたまたま居合わせたお客に、かつてここに日本人の収容所があ

り、それはその後どうなったのであろうかと聞いてみたが、そのようなことは噂にきいたことがあるくらいで、くわしいことは何も知らないという心もとない返事であった。店主は他所から一〇年前に移ってきたという人だし、お客は土地者といっても、収容所閉鎖後かなりたって生まれた人であったから、知らなくてもそれはしかたのないことであった。

それでも、村から収容所に仕事で通ってきていた人がいたのだから、あるいはと思って二、三の名前をあげてみると、その人たちもすでに村にはいないとのことであった。

私たちにとって、一生を左右したあの大事件、太平洋戦争下にアメリカの西部沿岸に住んでいたすべての日本人の体験した「収容所」の生活とその前後数年間の時間は、もはや砂漠の風とともに跡かたもなく消え去ってしまったのであろうか。

なにも、生々しい傷跡を求めて収容所跡を訪ねたわけではなかったし、もし当時のバラックそのままだがここに建ち並んでいたら、それはまた、いやなものであったろう。

ただ、ひょっとして、私くらいの年格好の村人がいて、いやあ、あの当時は大変でしたなあ、といった言葉がかわされ、いまはお互いに仲よくやっていることを、背話をしながら話せたら楽しかったろうに、という程度の気持であった。

妻が、長男を指さして、彼はこのマーケットの裏にあった病院で生まれたのだと話すと、ようやく二人は、なつかしそうに、

「ほおう、ではあなたはわれわれの村の先輩だ」

といって手をさしのべて握手した。長男にしてみれば、この地で生まれたとはいふものの、そのアメリカ人と同じく、索漠とした荒野で、ストライキが、暴動が、軍隊接収がそして殺人事件や市民権放棄がおこなわれたことはほとんど知らない。人びとを狂気へ駆りたてていった出来事を私から聞いて、はじめてある感慨をいだくくらいであった。

あの出来事は、すでにもう充分に過去の中に入ってしまった。

あれから、アメリカも変わり、日本はさらに大きく変わってしまった。ついに日本へ帰らず、アメリカの地で仕事をみつけ、生活と家庭をきずいてきた私も、この大きな変動の時代を夢中になって生きてきたのだった。過ぎ去ったことをことさら思い出す必要もなく、また思い出したくもなかったのである。

しかし、人生のいわば最終コーナーにさしかかって、現在の日本を思い、アメリカの日系人を思うたびにふと、私の戦時下での体験が何かにつけよぎることが多くなった。

私の住む町にも、そしてアメリカのいたるところにも、“日本”が、わがものの顔に歩いている。それは日本製の小型自動車であり、旅人の肩にさげられた日本製のカメラであり、そして、旅行社のスケジュールに従って決ったコースを歩きまわり、気前よくお金をばらまいてゆく日本人そのものである。何という変わりようであらうか。

アメリカの都市という都市に、まるで雨後の筍のように出現した日本食レストランと日本食ブーム。ロサンゼルスだけでも三五〇軒をこすのではなからうか。日本人観光客が年間数十万の数でおし

かけ、日本語の看板をかけた店で、日本語の喋れる売子からおみやげを買っていく。そのおみやげすら日本製であったとはよくきくことである。若ものの旅行者は、アメリカ製のGパンをはき、ただひたすら格好よさを求めて東または西海岸を、摩天楼のニューヨークを、夢の遊園地デズニールランドを、さては博打の町ラスベガスをさまよい歩く。もはや、アメリカも日本もなく、ただ一つの文化圏のような感じすらいだく。

アメリカに青雲の志をもって渡った私たちの時代には考えられないことである。

戦後の奇蹟的な経済復興から、やがては世界の経済大国にのしあがったのだから、衣食足った日本の観光客がアメリカに押しかけても、またアメリカに日本製品があふれてもなんらおかしいことではない。だれも、愉快な顔こそすれ、不思議がるものなどいないのだ。

そんなものなのだろうか。日本とアメリカが、あたかも同じ文化圏のような蜜月旅行をしているのは、なんの不思議もないことなのだろうか。私の胸をよぎるのは、わずか四〇年ほど前の苦しい出来事の思い出の断片だけではなく、ほとんど一〇〇年になろうとしている、在米日系人の長い道のり全体なのだ。その長い道のりがあったからこそ、今日があるのだという思いである。

若い人たちはもちろん、そんな昔のことを知るよしもない。太平洋戦争下の日系人がどんな苦勞をしたかも知りもしない。私も、そんな話をことさらしようとは思わなかった。

しかしいま、長い道のりのすべてではないにせよ、戦争前からのほとんどを見てきた者として、どうしても、このことは話しておきたいのである。

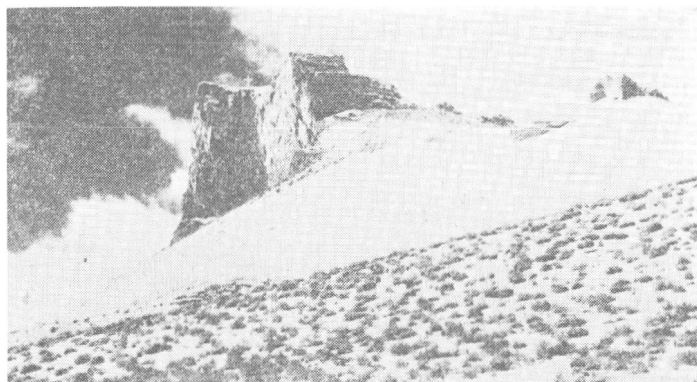
日本が、アメリカと戦争をした時代があり、そのとき日本人は「鬼畜米英」とのしり、残酷な戦場に、十幾万もの日米両国の若者を葬った。アメリカに居住した日系人は、帰化不能の外人として、太平洋岸諸州では土地ももてず、人種的差別をうけ、十幾万という日本人の血をわけた人間が、羊のように、牧舎ならぬ収容所に追ひこまれていった。

そのことを、うらみとか傷とかいいう思いで語ろうというのではない。そうした、お互いの苦しい体験があつて、今があるのだといいたいし、またこれからもある国の中における少数民族にはどういう経験が横たわっているかわからないといいたいのである。

すでにアメリカ人の中にも当時を知る者が少ないのは、現地を訪れてみればわかる。日系人の受難など、彼らにしてみれば小さな出来事にすぎない。しかし、私にしてみれば、また、私と同様のアメリカに住む日系人七〇万人にしてみれば、これは、記録にとどめておきたい、大事な歴史なのであり、これはぜひ、日本の若い人にも知ってほしい民族の体験なのである。

そして、他國に、異人種の中に生きることが、どのようなことなのか。まして、戦争という事態の中で、敵性異民族は、少数民族は、どのような扱いを受けるのか。なぜそうなるのか。なぜ、民族というものが、人種というものがかくも問題になるのか。なぜ、国というものが、祖国というものが問題になるのか。人間にとって、民族とは、国とは何か。

そうした問題をあたかも実験のように体験したことを、日本人の歴史として知ってほしいのである。考えてほしいのである。



キャッスル・ロックと十字架

ふと見上げると、ツールレーキの南方高くそびえるキャッスル・ロック（当時は「城巖山」と当て字していた）の頂上に、白い十字架が光っていた。かつて、キリスト者たちが、切ない平和への祈りをこめて立てた木の十字架が、いまは新しいコンクリートの白い十字架となって、すでに荒野と化した収容所跡を見守るように立っていた。

平和の祈りは、人類の共通した願いでありながら、ツールレーキという小さな場所においてすら、実現するのに困難なことだった。そこにあった問題を「差別」という一語で片づけ、現在は日系人への差別も少なくなっていると言ってしまうには、あまりに多くの問題が残されていると思う。

以下は、当時私が記しておいたメモをたよりに、太平洋戦時下にもっとも反抗的な日系人を集めたといわれる「ツールレーキ日本人収容所」の三年半の間を、事実のみ綴ったものである。

目次

まえがき 1

日米開戦前夜のアメリカ 11

真珠湾奇襲の日から 33

「鶴嶺湖」収容所 57

騒動に明け暮れる日々 83

星条旗に忠誠を誓うか 113

過激グループと軍隊との抗争 143

絶望へいたる風景 175

戦後のたたかい 215

むすび 257

あとがき 263

カリフォルニア日系人強制収容所

日米開戦前夜のアメリカ

●一世の気持は、二世に伝わらない

私がスタンフォード大学院にやってきた初めの一、二年つまり、一九三七、八年（昭和十二、三年）といえば、蘆溝橋事件から始まった日華事変が全面戦争に突入して、日本の軍國的な空気がそのままアメリカの日系社会にも強烈に反映していた時代であった。

一世たちは、アメリカで発行される日本語新聞や、日本からくる雑誌などで、勇ましい祖国を偲び、いわゆる必勝の信念を燃やしていた。また毎週末には、各地の仏教会ホールや日本人会館などで上映される日本映画のスクリーンで、支那大陸の青空にへんぼんとしてひるがえる日章旗や、無敵帝

国海軍の偉容や、尽忠無比の勇敢な空の荒鷲の活躍ぶりを眺めては、感激の涙を流していた。時局ニユースの終るたびに、必ず吹奏される「君が代」や「軍艦マーチ」をきくと、郷愁の涙はひとしお止らぬようであった。

一世の親たちは、目ざましく躍進する大日本帝国の偉大さや、東洋平和のため戦う日本の使命などを、二世の子供たちに一所懸命に吹き込んだが、子供たちは親の言葉に対して、何の反応をも示さなかった。彼らはアメリカの学校へ行けば、教師やアメリカ人の生徒たちから、日本兵の南京大虐殺の残忍さや、民主主義の敵である独裁国家日本などのことをきかされていたからである。

一世と二世の意識のずれは、日中戦争を機に一気に露呈してきていたが、なにもこの時に限ったことではなかった。

私がカラマズー大学を卒業した直後に引きうけた、中部カリフォルニアのセルマという田舎町の日本語学校でも、日常生活の中で、一世と二世の気持のずれをしばしば見ることができた。

そもそも、日本語学校に熱心なのは一世で、二世の生徒は、一向に学習の意欲がない。二世にしてみれば、日本語はすでに外国語にすぎず、どうしても学ばねばならぬものではない。それを、毎日公立学校へ通ったその週末に、日本語学校へ通わされるのはやりきれないふうであった。それが高等学校にもなると、アメリカでは猛烈な詰めこみ勉強をさせるので、その上さらに日本語を習えといっても、もうそれは重荷でしかなかった。

一世の親にしてみれば、子供が日本語を覚えてくれなければ困るのである。移民の初期には、金を

つくったら日本へ帰るつもりだから、日本語を勉強してくれなくては不便なことが多かった。しかし、二世も成長し、一世も土地に腰を落着けるようになると、別の意味から日本語が必要になる。

一世は英語が不得手だから、英語のできる二世をアメリカ社会とのパイプ役にしたい。その二世から、日本語でぜひとも話をききたいのである。だから日本語を習わせるのに一世が熱心になる。

むろんそればかりでなく、一世にしてみれば、日本人としての物の考え方や価値観を、自分と同じように持つてほしいという願いもあっただろう。

一世と二世の意識のずれが、ことばの問題から生じるのはやむをえないことではあった。それでも、二世が小学校に入るまでは、都会は別として、白人社会と離れて生活する田舎の環境ではさして問題にならない。日本人親子の距離は近く、家庭内でも日本語ですべて通じるのである。

それが小学校に入学したとたん、二世のことばは英語にかわり、日本語も、しだいに複雑な表現をしなければならぬようになる。そうなると関係はあやしくなっていく。日常会話程度ならなんとかするが、親子のコミュニケーションを深い部分では欠くようになるのであった。

よく一世の人が、この国では「親子の縁が薄い」と嘆くのを聞いたものである。親子の「情」が通じなくなるのと言ったことばであった。

これが日常であったところへ、祖国が中国と戦争をしている状態に直面した。一世がまるで自分が戦争をしている気になったとしても、二世にとっては、よその国「日本」のことにすぎなかったのである。

●日本から来る嫌な日本人

このころ、日本から勇ましい政治家たちが目白押しにやってきては、大東亜共栄圏建設の宣伝に及んだ。「米英何するものぞ!」「明日の世界は日独伊の意志によって決まる」などとぶちまけて当てるべからざる気焰であった。彼らの中には、一世から講演会の入場料をとり、日系人間の有力者の家を訪ねて、ご馳走になるのはまだいいとして、政治資金まで吸い上げて帰るのがいた。帰れば帰ったで、あたかもアメリカ人に、日本の国威を宣揚して帰ったかのように宣伝して歩いたのもいた。だが祖国愛と郷愁ひとしおの一世たちは、そんな客でも喜んで迎えて、もてなしたのである。

またそのころ、アメリカの学術視察という名目で、日本の一流大学の学者グループが送りこまれた。そのうち少数の学者を除いてほとんどが、日系人間を渡り歩いては、そこからわずかばかりのアメリカの情報を掴んで帰るにすぎなかった。彼らも政治家同様に、アメリカから何も学ぶべきものはない、むしろアメリカこそわれわれから学ぶべきものが多いのだと豪語して、学術的知識のない一世たちを喜ばせた。

中には、ずいぶんひどいのもいた。大阪の国立大学の熊谷工学部長で、いまでも忘れることができない。視察の目的はなんでも、ニューヨークを中心とする電力配置と交通事情の調査とかいうことであったが、アメリカの科学を頭から見下していた彼は、同行の教授グループから離れて、ただ独り、私の知人宅に居候を決めこんでいた。つれの教授たちが東部沿岸地方から帰ってくるまで、彼は大家